

「青年海外協力隊」

高野 光輝

TAKANO Koki

フィジーで目の当たりにした ゴミ問題の現実

「人種や国を問わず、異なる考えを持つ人々と切磋琢磨しながら自分を高めたい」。大学卒業を控えた高野さんにとって、それは譲れない価値観だった。「人生の糧」となる道を求め、青年海外協力隊としてスタートを切ったのは、エメラルドグリーンの海に浮かぶ楽園、フィジー共和国だ。高野さんは、2013年7月の赴任以来、観光で栄える街の陰で深刻化するゴミ問題に取り組んできた。「ボランティアの派遣は私を持って終了

JICA Volunteer Story

PROFILE

1991年新潟県出身。大学では、森林生態学を専攻。卒業後、2013年7月から青年海外協力隊(環境教育)としてフィジー共和国で活動中。

「知る」ことから始める「ゴミ問題の改善」

大学時代、日本で住民を対象とした環境教育に携わってきた高野光輝さん。現在は、フィジー屈指の観光地で、持ち前の行動力を発揮し、多くの人々を活動に巻き込みながら、ゴミ問題の改善を目指している。

となります」。その言葉には、地域のより良い未来を願う切実な思いと、これまでの並々ならぬ努力の跡が刻まれていた。

ビチレブ島にあるフィジー地方自治省、シンガトカ町役場の保健建築課に赴任した高野さんを待っていたのは、深刻な現状だった。町役場が管理する廃棄物の最終処分場は、火災や悪臭、ゴミの飛散が日常化し、住民から苦情が寄せられていた。前任の隊員が進めてきたゴミの削減や分別の学校教育もまさかの休止状態。「地域の人々と、現状を変えなければならぬ」という共通認識を築くことから始めました」と高野さんは振り返る。

独自のアイデアで 環境委員会を設立

シンガトカでは、運搬したゴミをただ積み上げるだけの「オーブンダンピング」方式で捨てている。フェンスも汚水への処置もないため、安全・衛生面ともにひどい状況だ。しかし、町役場には十分な予算も技術もなく、場当たり的な対応しかできずにいた。「政府機関や学校、NGOなど、地域のあらゆる利害関係者を巻き込み、役場の負担を小さくすることで持続的に問題の改善を図りたい」。そう考えていた高野さんの胸には、地域の有志で「環境委員会」を立ち上げ、ゴミ問題に自主的に取り組んでもらうという独自のアイデアがあった。「ゴミ問題の解決を通して、郷土愛を深めてほしい」。そんな思いで協力を呼び掛けたところ、有名リゾートホテルをはじめ、近隣の自治体、日本や台湾のNGOも加わり、着任の翌年には委員会の構想が実現した。こうして、学校で環境教育を行う「クリーン・スクールプログラム」や、ホテルでのゴミの削減・分別などの休止していたプログラムは、地域による地域



a. 小学校で環境教育の授業をする高野さん。子どもたちは廃材を使って工作することを学んだ
b. 町の市場から排出される生ゴミを分別・回収する。運搬後のゴミは日本のNGOのもとで堆肥化される
c. 改修工事前のシンガトカ最終処分場。現在は、散在していたゴミは砂で覆われ、分別投棄がされている
d. 昨年のクリーン・スクールプログラムの表彰式。取り組みを実施する学校の教員らが1年の成果を発表した



JICAの技術プロジェクトと連携し、改修工事に取り組んだ町の最終処分場がオープニングを迎えた。看板は高野さんの自作だ



のための活動として新たに動き出した。

「クリーン・スクールプログラム」では、地元の教員の意見を取り入れ、小学校10校で、ゴミの分別の推進や、ポイ捨て禁止の呼び掛けなどを行う「環境児童オフィサー」を任命する制度を導入。「今では、独自にクラス対抗コンテストを実施する学校も出てきました。ある校長先生から、『今後も自主的にプログラムを続けていきたい』と言われたときはうれしかったですね」と高野さんは語る。また、ホテルでは、ゴミの削減や分別を推進したところ、ホテル側が自費でシュレッダーを購入したり、ゴミを分別するためのリサイクルボックスを設置するまでに意識が高まった。こうした活動の結果、ゴミの廃棄量は現在、確実に減りつつある。同時に、JICAプロジェクトの専門家と最終処分場の改修工事にも取り組んだ高野さん。衛生面の問題は大きく改善し、火災も激減。住民からの苦情はなくなった。地元の人々との協力について、高野さんは「時間の感覚の違いや突然のキャンセルも珍しくなく、赴任当初は戸惑うこともありましたが、打ち明ける。それでも、「活動を通して関係者との距離が縮まった」と話す背景には、訪問した学校には写真やコメントを加えたレポートを共有し、お礼状も忘れない、といった高野さんならではの細やかな心配りがあった。

今後、シンガトカは協力隊の助けなしに取り組みを継続していかねばならない。活動の簡略化に加え、高野さんは「知る」ことが大事だと話す。「知ることは、行動するための第一歩です。私にできることは、多くの人に現場を見てもらい、次なる行動につながることを願って現状を知らせることなのです」。その言葉どおり、高野さんは、地域の情報誌などのメディアを通じて、情報発信にも努めている。高野さんの地道な努力が、今、シンガトカの町で「行動」の輪を広げている。